

本学におけるインターンシップの授業について

西川 篤志

Internship program in Chiba-Keizai College

Atsushi NISHIKAWA

Abstract

We briefly introduce the implementation of internship programs at universities and colleges in Japan, and the number of internship programs for students has increased steadily. Then we report the current state of our internship program and the characteristic of our program.

Key-words

internship program

1. はじめに

私は、2008（平成20）年度から2017（平成29）年度まで本学ビジネスライフ学科でインターンシップ委員を務め、インターンシップの授業を担当、支援してきた。2017（平成29）年12月13日に千葉経済大学短期大学部の授業事例研究会においてインターンシップの授業について発表した内容を中心に、2018（平成30）年度の実習状況なども加えて、本学におけるインターンシップの授業について紹介する。開設から約20年が経過した本学のインターンシップの授業について、学科や科目の改編などの経緯を記録として残すとともに、本学のインターンシップの授業の特色などについて再確認し、今後の発展につなげることを目的のひとつである。本稿では、まず近年の日本の大学を中心としたインターンシップの進展と現状などについて触れたのち、本学におけるインターンシップの授業の進展と現状、特色について紹介する。最後に今後の課題なども含めてまとめとする。

2. 日本の大学等におけるインターンシップの進展と現在の実施状況

社会の現場において仕事を体験する実践的教育は、教員や医師の養成などの特定の資格の取得を目的とする専門職を中心に古くから行なわれてきている。ここでは、特定の専門的な知識、技術、資格の修得を目的としたものではなく、より一般的な職業観や社会人として必要な基礎力を養うことなどを目的として近年進められているインターンシップについて、最近の進展について紹介する。まず年表の形で、ここ30年間の主な動きを順を追って表1に示す。

1991年に経済同友会が教育改革の基本理念についてまとめた提言「『選択の教育』を目指して」^[1]の中で、「教育界との相互交流の1つとして学生のジョブインターンシップへの支援」を取り上げたことが発端のひとつとなっている。平成の初めのバブル経済の崩壊、経済のグローバル化の大きな波の中で、産業界のニーズに応える人材の育成が求められてきた。

表1 インターンシップをめぐる動き（1991年以降）

年	事項	内容
1991	経済同友会 提言 「『選択の教育』を目指して」	産業界からの教育提言として 「教育界との相互交流の1つとして学生のジョブインターンシップへの支援」
1997	文部省、通商産業省、労働省（いずれも当時）の3省合意 「インターンシップの推進にあたっての基本的な考え方」	インターンシップとは、 「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」と定義
2014	日本再興戦略 文部科学省、経済産業省、厚生労働省 「インターンシップの推進にあたっての基本的な考え方」一部改正	インターンシップの望ましい在り方の中で、 「インターンシップが大学等の教育の一環として位置付けられ得るものであり、大学等が積極的に関与することが必要である」とし、事前・事後教育など大学がサポート体制を整えることを求めている。

その後政府においても、インターンシップが、高等教育における創造的人材育成に大きな意義を有するとともに、新規産業の創出等を通じた経済構造の改革にもつながるという観点から、1997年に閣議決定された「経済構造の変革と創造のための行動計画」及び文部省（当時）の「教育改革プログラム」において、インターンシップを総合的に推進することとしている。これを受けて、当時の文部省、通商産業省、労働省の3省合意の文書「インターンシップの推進にあたっての基本的な考え方」^[2]がまとめられ、その中でインターンシップとは「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」と初めて定義された。この「基本的な考え方」の中でインターンシップ推進の望ましい在り方として、インターンシップの形態として次の3つの形態（類型）を挙げている。

- イ 大学等における正規の教育課程として位置付け、現場実習などの授業科目とする場合。
 - ロ 大学等の授業科目ではないが、学校行事や課外活動等大学等における活動の一環として位置付ける場合。
 - ハ 大学等と無関係に企業等が実施するインターンシップのプログラムに学生が個人的に参加する場合。
- そして いずれの類型においても、インターンシップの

効果が発揮されるよう、個々の大学等や企業等が独自性を発揮しつつ、多様な形態で行われることが望ましいとしている。また同時に、インターンシップと称して就職・採用活動そのものが行われることのないよう留意することも求めている。

このような政府の動きを受けて、インターンシップ研修の重要性が認識され、普及・推進が図られた。そして大学等において学生への就職支援の一環として急速に広まり、さまざまな形態で実施されるようになった。

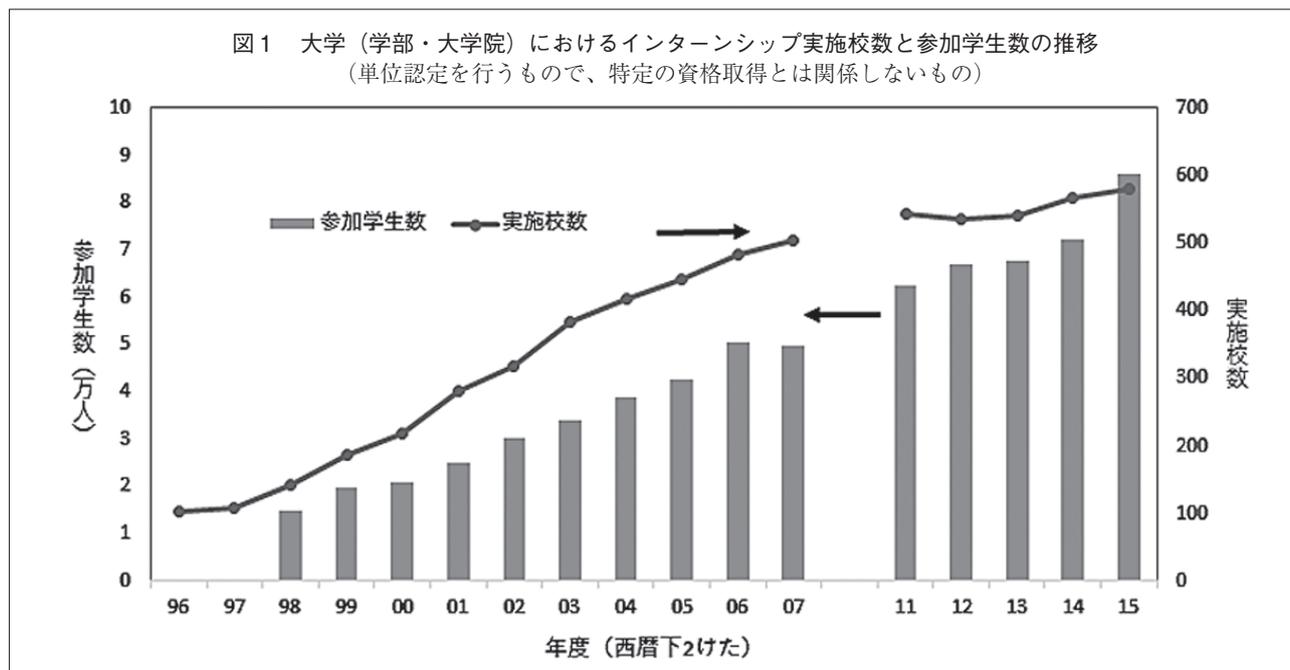
さらに、2013年に閣議決定された「日本再興戦略」においては、我が国の将来を担う若者全てがその能力を存分に伸ばし、世界に勝てる若者を育てることの重要性に鑑み、インターンシップに参加する学生数についての目標設定や、キャリア教育から就職まで一貫して支援する体制の強化、インターンシップ活用の推進等が提言された。これを受けて、作成後15年が経過した「基本的な考え方」の見直しが行われ、2014年一部改正されたものが文部科学省、厚生労働省、経済産業省により発表された^[3]。その中の先に挙げた3つの類型を示した望ましい在り方の中で、「いずれの類型においても、インターンシップについては、大学等の教育の一環として位置付けられ得るものであることから、大学等が積極的に関与することが必要である。この観点から、事前・事後教育

等の機会を提供する等のサポート体制を構築することは、その教育効果を高めるといって有益である。」として、大学のインターンシップへの積極的な関与を求めている。

次に大学等におけるインターンシップの現在の実施状況について見てみることにする。文部科学省は、全国の

大学（学部・大学院）、短期大学、高等専門学校を対象にして、毎年インターンシップの実施状況を調査し、結果を報道発表の形で公表している。2015（平成27）年度における大学等におけるインターンシップの実施状況の調査結果の資料^[4]にもとづき、現状について簡単に報告する。

図1 大学（学部・大学院）におけるインターンシップ実施校数と参加学生数の推移
（単位認定を行うもので、特定の資格取得とは関係しないもの）



まず1996（平成8）年度～2015（平成27）年度の大学（学部・大学院の合計、以下同じ）におけるインターンシップの実施校数と参加学生数の推移を図1に示す（2008年度～2010年度については調査データなし）。これは単位認定を行うもので、特定の資格取得に関係しないインターンシップに限ったものである。1996年度には大学において100校程度であった実施校が、2015年度では実施校数581校（実施率74.3%）、参加学生数86,248人（参加率3.1%）となっており年々着実に増加していることが分かる。一方短期大学では、2015年度の実施校数135校（実施率39.4%）、参加学生数5,894人（参加率4.5%）である。短期大学における実施率、学生の参加率がいずれも低いように見えるが、特定の資格取得に関係しないインターンシップを行う経済・経営系や教養系の短期大学の数や学生数がそもそも少ないことによる。現在の短期大学をみると、幼児教育など特定の資格取得（教員資格等）を目的とした学科が多数を占めており、当然のことながら特定の資格取得と関係するインターンシップ（教育実習

等）を実施している学校および参加学生の割合が大きくなっている。

以下特定の資格取得に関係しないインターンシップの内容についてみてみる。実施学年では、学部3年・修士1年・短大1年・高専4年がそれぞれ最も多い。実施時期は各学校種とも8月・9月（夏期休暇期間中）が多く、実施期間は大学（学部・大学院）・短大では1週間～2週間未満、高専では2日～1週間未満が最も多くなっている。単位数は大学（学部・大学院）・短期大学では2単位、高等専門学校では1単位が最も多く、必修・選択別では、各学校種とも選択が最も多い。

3. 本学におけるインターンシップの授業の進展と現状

インターンシップの授業の開設とその後のキャリア教育を含めたカリキュラムの改編

本学のインターンシップは、2001年度に当時の商経科、経営情報科の1年次における就職指導に組み込まれて始

められた。当初から短大の正課のカリキュラムに取り入れられ、成績評価、単位認定を行っている。最初は学生の就職支援の一環として、企業など現場での実習、実体験の必要性が求められてのものであった。

その後商経科、経営情報科が統合・再編されて2004年にビジネスライフ学科が新たに発足、科目「キャリアデザ

イン」の新設などキャリア教育の充実が図られ、科目「インターンシップ」も就職指導の中から独立、事前指導→実習→報告書・報告会と半期で完結する科目として確立されてきた^[5]。以下に年表の形で、学科やカリキュラムの改編と本学におけるインターンシップの授業の進展を示す。

表2 本学における科目「インターンシップ」の推移

年度	科目の位置づけ 関連する事項、科目など	科目の内容	担当
2001	商経科・経営情報科（いずれも当時）の専門科目の中に選択科目として設置	実習の事前指導（7月）、実習（8～9月）、就職活動スタートセミナー（10月）、就職関係の模擬試験、適性試験（2月） すべてを含む内容	就職課・就職室（当時）が指導の実務。 成績評価等は教務部部長、副部長、就職部部長があたるとる。
2004	商経科・経営情報科（いずれも当時）の統合・再編により、 ビジネスライフ学科発足 フィールド制で科目を配置 インターンシップは、 ビジネスキャリアフィールドに配置 秘書学、現代ビジネス、ビジネス文書、ビジネス英語などのビジネス、オフィス教育の科目と同じ分類に。	同じ内容、形態で継続	
2006	ビジネスライフ学科カリキュラム改定 科目「キャリアデザイン」必修で新設（1年次：前期、後期各1コマ） インターンシップは「ビジネス基礎と教養フィールド」の中の「ライフデザインユニット」に配置。 教養、キャリア形成の科目としての位置づけ	就職指導から独立 前期週1コマの授業、夏季休業中の実習、 秋に報告会 ほぼ現在の形態が確立	インターンシップ委員会設置（教員3名） インターンシップ委員の教員とキャリアセンターの職員を中心に、実習の事前指導、実習中の企業等訪問、実習後の報告書（レポート）の取りまとめ、実習報告会、成績評価にあたる。
2008	ライフデザインユニットの改定 教養科目と社会人としての基礎力・実務能力を身につける科目の分離 インターンシップは社会人として必要な能力を身につける科目として、 ベースアップステージの中に配置	内容は2006年以降 基本的に同じ	
2011	科目「インターンシップ」に専任教員を配置。	内容は2006年以降 基本的に同じ	「インターンシップ」担当教員が前期の事前指導と成績評価にあたる。 それまでのインターンシップ委員は、実習中の実習先企業等の訪問と実習後の報告会の運営が主たる仕事となる。

現在の科目「インターンシップ」の内容と特色

短期大学1年次、前期1コマ15週の教室での授業、夏季休業期間中（8月～9月）の実習、実習後に実習日誌、報告書の提出、報告会（10月～11月、1人5分ずつ発表）を内容として、2単位の選択、実習科目として実施している。専任教員1名が担当し、キャリアセンター職員が実習先企業との連絡、調整などの実務を支援している。またインターンシップ委員の教員など関係教員が実習中の企業訪問や報告会の運営を支援している。

実習前の教室での授業の内容は、ひとつは各自のインターンシップ志望動機を明確にし、業種、職種など企業について調べ、実習先企業を決定することである。担当教員との面談などを重ねて6月～7月には実習先を決定するようにしている。もうひとつは実習で現場に出て戸惑うことがないように、社会常識、ビジネスマナー（あいさつ、電話対応、報告・連絡・相談、日誌の作成など）などを身につけるための実技指導である。

実習は企業・団体等に夏季休業期間中（8月～9月）で、5日～1週間程度の期間を目安にお願いしており、各企業・団体等の指定の3日～2週間程度で実施している。実習期間中、学生は毎日日誌を担当の社員・職員に提出し、指導を受けるようにしている。また実習中に授業担当教員、インターンシップ委員の教員、キャリアセンター職員で手分けして実習先を訪問し、学生受け入れのお礼と実習状況を伺うようにしている。また実習終了後には、

実習先担当者から大学宛てに実習の成績評価をいただいている。

夏季休業終了後に、学生はA4用紙1枚の実習報告書を提出する。内容は実習先、期間、実習先概要、インターンシップ参加の動機、実習内容、所感である。同時に報告書に書いたこととほぼ同じ内容で、パーソナルコンピュータのプレゼンテーションソフトを利用して、報告会発表用のスライド4枚程度を作成し、提出する。

そして10月～11月に報告会を行い、1人5分ずつ、1コマ（90分間）に15人程度発表、今年度は3コマずつ2日間（2週）に分けて計6コマ実施した。インターンシップ関係の教員が運営にあたり、ビジネスライフ学科の教員に開催とプログラムの案内を行っている。さらに今年度（2018年度）から、実習先の担当者にも報告会の案内をしたところ、受け入れた学生の発表に合わせて数社の方々にお越しいただき、実習中のことや発表内容に関して貴重なコメントをいただくことができた。また学生には自分が発表するコマおよびそれ以外のコマでの聴講を義務づけている。これは他の学生の実習先企業などについて理解を深めてもらうとともに、話し方やスライドの作成など発表の仕方についても勉強してもらうためである。

参考までに過去3年間の実習先分野別の参加学生数を一覧表にして表3に示す。現在本学ビジネスライフ学科は1学年の定員140名で、そのうち毎年約90名（参加率

表3 過去3年の実習先と参加学生数

実習先		2018年	2017年	2016年
公務員	県庁、市役所など	5	4	3
金融関連	信用保証協会など	2	2	7
ディーラー	自動車販売店	6	8	11
企業	製造、旅行会社、不動産、書店、小売など	20	23	18
ホテル	ホテル、結婚式場など	17	7	9
団体職員	商工会議所など	13	14	14
医療・福祉	病院、医院、施設など	15	25	14
図書館	公共図書館、本学図書館	8	1	10
アパレル	ファッション小売	6	6	4
合計（参加率：1年生全体に占める割合）		92（66.2%）	90（62.9%）	90（58.1%）

約60%強)の多くの学生がインターンシップに参加している。

以上が本学でのインターンシップ実施、修了までの手順である。幸い20年近くにわたり、学内、学外の皆様の理解と協力を得て、大きな事故やトラブルがなく実施できていることは本当にありがたいことである。本学のインターンシップの特色は次のとおりである。

まず上記に示したように参加学生数が多いということである。短期大学の場合、入学したと思ったらすぐに自分の将来の進路、キャリアについて考えるということになってしまうが、業種、職種など職業についての理解を深め、自分の適性を知るためにもインターンシップの参加を勧めている。

また大学としても実習に送り出すだけでなく、事前・事後の指導に力を入れていることである。実習後に報告書をまとめ、発表会を行うことにより、改めて志望動機を振り返り、成果や今後さらに考えたり、勉強したりしなければならないことを確認し、1年次後期以降の学習や将来の進路選択に生かすようにしている。

実習先企業や団体との連絡などの大学側の窓口はキャリアセンターが務め、実習中に教職員が訪問して、企業・団体等と適切な連携を図るように努めていることも特徴である。実習や報告会などの場で外部の目で学生の評価やコメントをいただくことは、われわれ教員にとっては教室内では分からない学生の姿に気づかされたり、学生にとっては将来の自信につながったりして、大変有益なことであると考えている。

4. まとめ

以上1990年代以降広く行われるようになった、学生が自己の職業適性や将来設計について考える機会を与え、社会人としての能力を高めることなどを目的としたインターンシップについて、進展の経緯と現状を簡単に振り返り、千葉経済大学短期大学部でのインターンシップの授業の内容と特色について紹介した。特に本学のインターンシップの円滑な遂行のために、忙しい中多くの学生を受け入れていただき、ご指導いただいている企業・団体の皆様にこの場を借りて改めて感謝する次第である。

学生の多くはアルバイトを体験しているが、企業・団体の皆様には、会社の仕組みなどについて説明していただいたり、仕事のいろいろな場面を体験させていただいたり、それぞれプログラムに工夫を凝らして学生の育成に力を入れていただいております。学生にはアルバイトでは得られない貴重な体験となっている。今後とも大学と企業・団体とで適切な連携を図りながら進めていきたいと考えている。

事後の学生の感想では、「あいさつ、笑顔、報告・連絡・相談など普段の仕事に対する姿勢の大切さに改めて気がついた」、「専門知識や技術をさらに身につけたい」など普段の姿勢や今後の勉強の意欲につながるものが多い。今後教室の授業では、社会人として求められる基礎的・汎用的な能力の充実を図ることはもちろん、実際の現場で体験したことをもとに、自ら課題を発見し、探求する能力も高めることができると考えている。

参考文献

- [1] 経済同友会：「選択の教育」を目指して：転換期の教育改革（1991年6月）
- [2] 文部省、通商産業省、労働省：インターンシップの推進に当たっての基本的考え方（1997年9月18日）
- [3] 文部科学省、厚生労働省、産業経済省：インターンシップの推進に当たっての基本的考え方（2014年4月8日一部改正）
- [4] 文部科学省報道発表資料：「平成27年度大学等におけるインターンシップの実施状況について」（2017年6月23日公表）
- [5] 「インターンシップ」、「キャリアデザインI・II・III」などの講義内容の詳細については、本学のウェブサイト (<http://www.chiba-kc.ac.jp/>) 上のシラバス参照